

平成28年度 第36回 東北地区小中学校教頭会研究大会岩手大会
～主題「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」～

青森市立大野小学校 柴田

- I 第1日目 11月16日(水) 全体会及び記念講演(盛岡市民文化ホール大ホール)
1 開会行事 13:00～14:00
2 記念講演 14:15～15:45

演題「学校・学級経営を再考する」～復興対策を視野に入れながら～
講師 早稲田大学教育・総合科学学術院 教授 河村 茂雄 氏



- (1) 被災地域・過疎地域に潜む問題
選択肢を見いだせないことが最悪なパターン。
→組織のすべてのメンバーでアクティブラーニングしていくことが打開策。
- (2) アクティブラーニング注目の背景
多様化しお互いにつながった世界において、人生の成功と正常に機能する社会のために必要な能力を身に付けることが求められている。
ア：言語や知識、技術を相互作用的に活用する能力。
→世界経済で一番有利な言語とは英語とICT言語。
イ：多用な集団による人間関係形成能力
ウ：自律的に行動する能力
エ：これらの核となる「思慮深く考える力」
- (3) アクティブラーニングを実質化させるために
→前提として学習集団の良好な環境が必要
ア：学習者が安心して自分の考えや意見を発言できる
イ：一定のルールの共有ができています
ウ：親和的な人間関係がある
→つまり、学級集団・教員組織の状態や質がアクティブラーニングの効果を大きく左右する。
- (4) 学校の教育力…4つの学校 河村先生が参加者に質問をしました。
A：全学級で教育力が高まっている学校
→校内の組織体制が機能している。
B1：学級ごとに教育力のばらつきがある学校
→超多忙：問題が整理されておらず課題設定がおそまつ
B2：学級ごとに教育力のばらつきがある学校
→停滞：教員個々の意欲が低下している
C：全学級で教育力が低下している学校
→荒れている学校
- (5) 教育実践をあげている学校の特徴
①学力調査の学校の成績が高い。
②不登校、問題行動、退学の発生率が全国・県平均値よりも低い。
③学級間で成果の落差が少ない
※これらは、教員組織力の差
- (6) 組織・集団のあたりまえの質とレベルは何もしなければ低下していく。
①対人関係の希薄化・無関心
→他の人がどこまで何をやっているか知らないで、自分の気ままなレベルでよしとする。
→低レベルの取組をしても他者から指摘されることもないので、それが継続。
②なれあい
→低レベルの取組を互いに許し合っている。正当化し合っている。
「まじめにやっている。忙しいから仕方がない。」これが、いいわけとなれあいへと。
→低レベルの取組をしていること自体が分からない。
- (7) 「あたりまえ」のことをやっている
①「あたりまえ」という感覚は、その人が意識せずに持っている行動の基準。
②人は「あたりまえ」のことをやっているとは者と話し合ったとき、勝手に自分と同じことをやっていると考える傾向がある。(実は違うレベルで話し合っていることに気付きにくい。)
③組織や集団の中には、その組織や集団のメンバーたちに暗黙に考えられている「あたりまえ」がある。
☆高い教育実践の成果をあげている学校は、そこの教員集団がもっているあたりまえの質とレベルが高いのである。
例) 全教職員が、始業のベルの前に、職員室から離席している。

(8) 「あたりまえ」の質をあげるために教員組織を学習する組織に

～組織はそのままでは必ず硬直化する～

組織を活性化させるためには

- ① 個々人がモチベーションをもって自己実現を図ること
- ② 組織としての共有ビジョン⇔個々人のビジョンの総和
- ③ 組織としての学習を続けること

※理想を話し合える集団をめざす。

(9) これからの管理職のマネジメント

～マネジメントの成否を左右する管理職の対人関係能力～

- ・ 従来：権威によって相手に圧力を与えて動かす。
- ・ 現代：相手が望む心理ニーズにうまく応えながら相手を期待する方向に動いてもらう。
(←→アクティブラーニングで求められる対応)

(10) 組織のメンバーの仕事の成果に影響を与えるモチベーション

～モチベーションに影響を与えるのは、金銭、ポスト以外に、承認欲求の充足である～

- ① 自己充実、自己有能感を得る
→自分なりの仕事をする意義、そのプロセスに充実感をもてる。
- ② 他者から評価を得る
→組織内における名誉の配分
→面白い仕事の配分
→細やかな「ありがとう」の言葉

II 2日目 11月17日(木) 分科会 9:00～12:10 ホテルメトロポリタン盛岡ニューウイング

参加した分科会＝第1B分科会：教育課程に関する課題

1 「特色ある学校づくりを推進する教育課程編成の工夫」
～学校間や地域との連携を図る教頭の関わりを通して～
宮城県 仙台市立住吉台小学校 教頭 及川 卓也



(1) 連携を図るうえでの教頭の関わり方

・ 窓口役

☆助言や支援：

- ・ 教頭自身に関すること

(2) 学校間や地域との連携を図り、特色ある学校づくりを推進するための教育課程を編成する際、教頭として特に重要視しなければならないと考えるポイント

- ・ 観点の絞り込みまたは拡大
- ・ 深化

☆新しい視点と既存を生かす：必要性、時代の流れ、数年先の学校が置かれている状況

- ・ 内容の見定め（できることとできないこと）
- ・ 共通理解

☆見通しと振り返り：目的、子どものすがたは？、修正点と改善、学校の特色

☆組織化（有機的な働き）：担当の明確化と組織の見直し・再編

- ・ 見える化

☆精選及び効率化：質のよい教育活動、バランス、

- ・ 学力向上
- ・ 地域・保護者の啓発
- ・ ボランティアへの感謝
- ・ 近隣校スタンダード（中学校区という意識）

2 「郷土を愛し、将来を担う児童・生徒の育成」

～地域の教育資源を生かした教育計画の作成と副校長の関わり～

岩手県 軽米町立晴山小学校 教頭 瀧野澤 公美

(1) 軽米町の教育資源を生かした体験活動を小中で整理（1中学校、3小学校）

(2) 軽米町の教育資源を活用した体験活動を系統的にまとめ、学校間の連携を進める

○地域の教育資源について、共通の観点で整理したことにより全体像が把握でき、学習内容の系統性や学校間のつながりが明確に。

○中学校でのキャリア学習の基礎づくりとして小学校でどのような力を身に付けていけばよいかを確認し指導に生かすことができた。

△教頭・副校長が校内の連携（担任の思いを反映できるように）を密にして推進すること。